

まえがき

石平

3

第一章 自信のありすぎる中国、あるふりをする韓国、
ないふりをする日本

日本はアジアの近代化の見本だった

19

「自信のない」日本人がなぜ近代化を達成できたのか

20

自信がありすぎた中国は近代化に失敗した

23

中国が自信を持つのはなぜ

25

思想を窒息させた中央集権制

26

中国を支配した科挙の害悪

27

自分を大きく見せたがる朝鮮人

30

中国の儒教と韓国の儒教

32

本当は自信がある日本人

34

朝鮮は主義主張にのめり込む

37

手仕事を賤しむ読書人・両班

39

技術と資本の蓄積をさせない社会

41

儒教精神から抜け出せない朝鮮

43

日中韓の女性の権利

46

●台湾と韓国の日本人に対する感情の違い

——台湾人に殴られた話はしない

48

第二章 革命に明け暮れる中国、外国勢力を利用する韓国

近代化の基盤は江戸時代から

51

平和な国、日本

56

平和な革命、明治維新

59

中国皇帝の権威の旗

62

朝貢の意味

63

「夷を以て夷を制す」

65

外国勢力を利用するのが朝鮮の伝統的政策	68
大国を手玉にとる朝鮮	70
壬午軍乱	72
東学党の乱	74
幕末の薩長と外国勢力	76
朝鮮の事大主義	77
性的なものに寛大な日本	80
夜這い	82
唐に学んだ管理売春	84
日本にしか残っていない中国の古典	85

第三章 西洋文明を拒絶した中国・韓国

中国と西洋の近代化のわかれ道	87
西洋文明を導入する機会を失った中国	89

中国でも韓国でも定着しなかった西学	91
日本で広がった蘭学の伝統	94
日本中にいたポルトガル人	95
日本に蘭学が普及したわけ	98
日本人に西洋医学を教えた『沈黙』の宣教師沢野忠庵	99
鎖国で日本の近代化は遅れたのか	103
ヨーロッパには科学技術はなかった？	106
改良能力がすごい日本	107
日中韓の発明	109

第四章 日中韓の行動原理——朱子学と「血」

軍人の社会的地位	115
「土」のいない国、日本	117
日本をきちんと見ない朝鮮通信使	120

バイアスで国を損なう

122

「はず」「べき」民族

124

打算で動く中国人、恨で動く韓国人

125

理と気の二元論

126

夫の死に殉ずる貞女

130

ドグマが嫌いな日本人

131

韓国の朱子学と宗教

132

神道と仏教の共存戦略

134

敵に寛大な国、日本

137

「血のつながり」が最も大事な中国・韓国

140

中国の宗族制度と祠堂

141

韓国の宗親会

142

日本人の合理性が近代化につながった

143

血縁主義の国、韓国。宗族がすべての国、中国

146

忠誠心と企業

147

悪口の「お国ぶり」

151

第五章 なぜ韓国・中国に「老舗」がないのか

韓国・中国に「老舗」がない理由

155

「喫大戸」——金持ちをとりつぶして富む国家

157

信用できない中国の統計数値

159

現代の「喫大戸」

161

韓国の経済

163

政権交代と官僚の「総取り替え」

165

賄賂が「身近な」中国

167

「野生の力」を持つ中国人

168

世界中にある中華料理

169

● 日本の中の朝鮮文化、韓国の中の日本文化

171

第六章 中国・韓国とどう付き合うべきか

中国の資源と環境問題

韓国の「反日」

日本はもつと主張すべき

南京大虐殺・慰安婦問題の議論

マスクコミとタブー

北朝鮮賛美、中国賛美の虚妄

宗教勢力を怖れる政治権力

「南無阿弥陀仏」を知らないお坊さん

なぜ中国は軍事的拡大を図るのか

やさしすぎる日本の絵本

北朝鮮問題は「ミュンヘン会談」か

平和をいくら唱えても平和にはならない

中国・韓国にどう対処していくのか

175

179

181

185

187

190

193

194

198

200

202

206

210

あとがき

豊田有恒

213

第一章 自信のありすぎる中国、あるふりをする韓国、 ないふりをする日本

日本はアジアの近代化の見本だった

石平 私は子どもの時代を出身国の中国で過ごしていましたが、そのときの中国は、毛沢東時代、文化大革命の最中でした。多くの国民が迫害されていて経済も文化も破壊され、中国近代史上の暗黒時代ということでした。しかも鎖国の状態で、外部の情報も何も知りませんでした。一九七六年に毛沢東が死去してから、鄧小平の改革開放が始まると、初めて外部の情報が入ってきたんです。それでわれわれは初めて、外の世界がわかったのです。

一九七〇年代の末、八〇年代では、日本も、アメリカも、ヨーロッパも近代化が進んでいまして、中国は徹底的に立ち遅れていました。しかも毛沢東時代の二十数年間、中国は完全に個人独裁の政治状況下で、一人の人間がすべての人の運命を握るような昔の皇帝独裁の時代に戻ったような国でした。したがって毛沢東の死後、このような中国という国をどうやって近代化させるのかは、私たちにとっての最大の課題だったのです。

そこで、初めて世界に目を向けて、近代化とは何かということ、いろいろと自分たちで勉強しました。その中で日本の近代化、特に明治維新というキーワードが出てきました。考えてみれば、幕末の日本は中国と同じように西洋列強の植民地政策の脅威にさらされていた。西洋列強がアジアにやってきて、中国にアヘン戦争をしかけて、それを植民地化していく。日本人はそれを見て、日本が中国の二の舞にならないのかと心配になりました。そこで日本の武士たちが立ち上がって、明治維新を成しとげて、日本という国を迅速に近代国家に仕上げた。

そういう経緯があって、中国の近代化への道を探る私たちからすれば、むしろ日本こそ、アジアにおける近代化の見本となっています。それはどうして日本が近代化できたのか、どうして中国が近代化できなかったのか、それが当時のわれわれの大きな問題意識でした。私自身も一九八八年に日本に来てからもずっとこの問題意識を持ち続けまして、自分なりに日本の近代化の歴史を勉強しながら中国との比較をやってきたのです。

豊田さんからみると、日本の近代化というのは、どのような歴史だったのでしょうか。

「自信のない」日本人がなぜ近代化を達成できたのか

豊田 私は日本の近代化は、日本人が自信のない民族だから達成されたのだと思っています。つまり自分たちのやり方には固執しないため、いいものがあると、遠慮なく取り入れてしまうところがあるのです。しかし、韓国、朝鮮の場合ですね、一三九二年に李王朝ができて、それ

で一九一〇年に日本に併合されます。その間、最後の十三年、一八九七年から一九一〇年まで、大韓帝国と称しました。これは日清戦争の結果、中国のプレゼンスが朝鮮半島から後退したためです。それまで皇帝という存在は中国にしかないはずなのに、自分たちが初めて皇帝という名乗りができたわけですね。すごく偉くなったような気になったんですよ。だから、朝鮮半島は、実際に自信があるかどうかはともかくとして、必ず自信があるというふうに振る舞っていないと、生きていけない歴史の国です。

古代の『三国志』から近世まで数え上げると、九百六十回も異民族に国内へ攻め込まれています。ほぼ、二年に一回の割合です。したがって、常に自分の文化、言語、風俗に齧りついでても、偉そうに振る舞わないと、生存すら脅かされてきたわけです。

その点、日本人というのは、単一民族ではないですがきわめて均質的な民族ですから、何も言わなくても言葉が通じたり、気持ちに通じたり、あるいは謙遜したほうが相手からよく見てもらえるという美点があります。そういう意味では、自分たちが自信がないように振る舞っていても、周りからひどい目に遭わされることがなかったのです。しかも、自分たちの方法に自信がなく、したがって固執しないからこそ、外国の文化、技術を抵抗なく受け入れることができたのだと思います。

邪馬台国の卑弥呼の魏への遣使にしても、大成功でした。本格的な外国文化の導入は、まず最初は、遣唐使からだと思えます。遣唐使でも、計画されたのが三十回ぐらいで、一四回ぐら

い成功している。これによって中国の一番最先端のものを持ってくるわけです。日本国内には、以前から何万人もの新羅、高句麗、百済の渡来人がいました。彼らをうまく使って、すでに、中国からの漢字、文化など、最低限の情報は得ていました。韓国・朝鮮の人々は、とかく日本に文化を教えたのは自分たちだと言いたがりです。しかし、朝鮮半島のほうが中国に近いうえ、歴代王朝に朝貢していたから、ダイレクトに中国から文化、知識が入ってきました。どっちが優れてるかの問題ではなくて、中国と近かっただけの話です。

日本という国、民族は排外的でないし、自分たちのやり方に固執しませんから、朝鮮半島からの渡来人をうまく利用して、遣唐使がもたらした最大の最先端の文化などをうまく日本に根付かせたわけです。平安時代になると、それがだんだん国風文化というものになってきて、自分たちのものにしてくるわけですね。そのあたりが、非常に日本的なんだろうと思います。

現代の産業分野なども同じですね。最新鋭の製鉄の技術があると、日本は真つ先に飛び付いて導入し、効率よく実用化するわけです。新しい技術ができて、確かにイギリスなんかは、一九世紀にできたトーマス転炉を、つい二〜三十年前までまだ使っていたそうです。自信があまりすぎるからでしょう。こうした例をみても、新しいもの好き (neophile) なんです。日本人は。自分たちの今までのものに自信がないところがみそで、こんなことではいけない、日本は遅れている、もつとちゃんとしなければいけない、と常に自分たちに言い聞かせているところがあって、そういう国民性が、逆にプラスに作用したのではないかと思います。

自信があまりすぎた中国は近代化に失敗した

石平 今回の豊田さんのお話には一つ大事なキーワードがありました。自信がある、自信がないというお話は非常に啓発的です。日本人に自信がないのであれば、逆に中国のほうには自信があまりすぎてそれが問題だったのです。

近代までの長い歴史の中で、おそらく二〜三〇〇〇年の間、中国人はずっと、自分たちこそ文明の中心だと本気で思っていました。「文明の中心」というよりも、中華こそは唯一の文明だと思っていたのです。

豊田 でも、事実そうだから。中国人は歴史の黎明期から、超先進的な文明を築いてきたからだと思います。自信があつて当然です。

石平 ご指摘のように、確かにアジアにおいては、中国はずっと文化の頂点に立っていました。そうなるのが当然のこと、昔の中国人はいわゆる中華思想的な自信が身につけて、それを信じて疑わないのです。中国の文明、われわれの文明以外に、他の文明があるはずがないと。

実際、中国が西洋文明と本格的に接触したのは、日本より早いですよ。清の王朝の康熙帝、乾隆帝の時代、イギリスが盛んに中国にアプローチする、なんとか中国と商売したいんですね。例えば乾隆帝の時代、イギリスは大規模の使節団を中国に派遣したんです。そこで、産業革命で誕生した新しい技術、知識というものの全部、中国へ持っていったのです。

しかし中国の王朝と皇帝は、イギリス人が持ってきたものを単なるオモチャ扱いしてしました。望遠鏡とか時計とか、おもちゃとして愛玩するけど、その背後に何か素晴らしい技術があるかどうかについてはまったく無関心でした。要するに、どこかのわけの知らない野蛮民族が変なものを持ってきた、それ面白い、との程度にしか思いませんでした。彼らはイギリス人が持ってきた測量機とか望遠鏡とかの機械の背後に、別の文明、要するに近代文明、技術と科学というものがあるとは決して認めない。中国文明こそは唯一の文明だと思っていたからです。しかし一九世紀になると、イギリスとのアヘン戦争に負けました。フランスとの戦争にも負けた。いろいろと戦争に負けて、負けた以上はどうにもならないから、中国人は初めて西洋の技術のすごさを認めました。しかしそれでも、当時の中国人は、西洋が優れているのは軍事力、軍事技術であって、それさえ取り入れればそれで十分だと思っていました。政治、哲学、思想、文学、芸術に関しては、中国は絶対上にあると信じていました。

例えば幕末の佐久間象山は「東洋道德」と「西洋技術」といつています。中国人も同じような発想でした。西洋から導入すべきなのはせいぜい軍事技術、それ以上でもそれ以下でもなかったのです。中国人が本格的に西洋の民主主義の導入を考え始めたのは清王朝の崩壊後です。しかしそのときには日本はすでに明治の末期、とつくに立派な立憲国家となっていました。さきほどの豊田さんの話を受けますと、日本は自信がないから何でも受け入れるということ逆ううまくいったわけですが、中国はその逆、自信がありすぎて失敗しました。

中国が自信を持つのはなぜ

豊田 それは本当です。中国があれだけの自信があるのも当然だと思います。東洋史を勉強して愕然としましたけれど、例えば漢の時代に、張衡という人が候風地動儀という機械を作っているんです。これは、近世まで使われていた倒立振り子の地震計と、原理的には同じものなんです。鐘のようなケースの中に振り子が入っていて、揺れると上のほうが大きいですから横に倒れて、外側に当たると、そこにある球体が突かれて落ちます。すると球ががんと音を立てるわけです。それで地震が起こったことがわかる仕組みです。どの方向の球体が落ちたかで、震源地の方角までわかります。明治期まで使われていた地震計を、それより二千年も昔に、すでに発明してしまっていた。

それから藪内清先生が紹介されていますが、晋代のお墓からジュラルミンの腕輪が出てくるんですよ。どうやって作ったかわからない。アルミニウムはボーキサイトを電気分解しないとできませんから、現代の科学をもつてしても、どういう方法で作ったのかよくわからない。

社会制度でも中国は抜きん出ています。周の時代までは封建制なんですけれども、それ以後は中央集権制で、大名がいらないわけです。中国と比べると、日本は幕末まで大名がいたし、ドイツも統一されずに諸侯がいたものが、やがてプロシアのホーエンツォレルン(Hohenzollern)家が統一する。イタリアもビットリオ・エマヌエル二世によって統一される。

日本も天皇家がその役割を果たしました。偶然かもしれませんが、日独伊三国というのは一番統一が遅れた国です。つい近世になるまで各地に大名がいたわけです。ヨーロッパでもイギリス、フランスには、もう封建領主はいません。そういう意味では、中国というのは二千年以上も昔に封建制を卒業して、秦漢の時代に早くも中央集権制の郡県制度を行なっています。

日独伊がそうなるのには、実に二千年もかかってしまうわけです。こういう点からも結局、人類史上、こんなに超先行的な文化というか、国家というか、民族というか、そういう存在は、中国の他にないのではないかな。だから、自信を持つのも無理はないのです。

思想を窒息させた中央集権制

石平 確かに、ご指摘のように、自信を持つてしかるべき面もあります。しかし中国が早めに封建制をやめて中央集権制になったことは、はたして中国にとつてよかつたかどうか、私は非常に疑問です。例えば、中国の哲学思想や文化文明を考えれば、最も輝いたものはない、封建制の時代に生まれたんですね。例えば、儒教といえればそれが思想として生まれたのは、中央集権制じゃなくて封建制の時代でした。封建制だからこそ思想の自由があるんです。ヨーロッパもそうでしょう。封建制というのは、中央集権制と比べれば権力構造が多重化して、国王がいて、貴族がいて、宗教勢力もあつて、いろんな勢力が並立している中で、知識人たちに自由に思索する空間があるんですよ。

中国は秦の始皇帝のときに中央集権制になってどうなったのかというと、皇帝一人がいて、官僚たちを使つて社会全体を管理するシステムとなりました。そうすると皇帝と王朝の奨励している文化、思想以外の存在を許さないので。前漢の時代、漢の武帝という皇帝は、儒教だけを唯一の国家的宗教に祀り上げる一方、他のあらゆる思想を排除したのです。そうすると漢の時代以来、中国の思想に何か大きな進化があつたかという、あまりないのです。

漢の時代から清までは、新しい学問として一応朱子学もありました。しかし、この朱子学も結局伝統の儒教思想に対する新しい解釈、新しい思想とはいえない。中央集権制になってから中国には、新しい思想が生まれる余地はないのです。

中国を支配した科挙の害悪

石平 もう一つ、中央集権制の中で科挙制度が導入されたことも思想を窒息させる大きな要因となっています。科挙制度の中では知識人たちは科挙試験に合格して官僚になるのが唯一の道ですから、思想家が出てこないのです。科挙試験に合格するためには、儒教の経典を勉強すれば十分なのです。

豊田 丸暗記しなければいけない。

石平 結局どういうことになったかという、あのころの中国の知識的世界がヨーロッパや日本とまったく違うのは、知識人という知識人、若者という若者が、みな儒教を勉強するのです。